

【研究ノート】

記憶の社会学と質的研究

Sociology of Memory and Qualitative Research

高山 真[†]

1. 〈漂流〉と〈抵抗〉の再検討

本稿は、長崎被爆者を対象として取り組まれた質的研究の調査経験について、調査者の立場性と語りを解釈する枠組みの関係という視点から検討することを目的とする。具体的には水野節夫による「生活史研究の多様な展開」(1986)において示された石田忠の「反原爆」調査の特徴と課題を糸口として、筆者による長崎被爆者調査をふまえ、石田の調査研究を経験的に捉え直すことにより、相互行為としてのインタビューの基本的な語りの解釈枠組みを参考とする分析からは見えてこなかった問題の所在を明らかにしていきたい。

水野は、石田の「反原爆」調査において示された〈漂流〉と〈抵抗〉という解釈枠組みについて、石田の調査において主要な協力者(インフォーマント)になった福田須磨子の生活史を分析する上では経験的に設定された有効な解釈枠組みであったと評価する。その一方、後述するように〈漂流〉と〈抵抗〉という解釈枠組みのもつ規範的な性質については、この枠組みを設定する石田自身の質的調査に対する基本的な認識との間に微妙なむずかしさを含んだ課題が残されていると指摘している(水野 1986: 176)。

筆者が取り組んだ長崎被爆者調査は、相互行為としてのインタビューを方法とするライフストーリー研究である。同一のテーマにアプローチするふたつの調査の差異は、主として、実証的な生活史(Life history)の聞き取りと、経験の語り方に注目する相互行為としてのインタビュー(Life story interview)により構成される語りの解釈をめぐる差異であるように思われる。簡潔に言えば、石田は原爆被災の個人的な経験を生活史として実証的に調査する方法をとり、筆者は、同じ経験を記憶として、すなわち過去を現在の視点から調査協力者と共同的に解釈した産物と捉える認識から語りについて検討してきた。

石田による調査も、筆者による調査も、ある特定の個人を「被爆者」として認識し、被爆者として生きる個人の語りの意味を明らかにすることを志向する点では認識を同じくしている。被爆者として生きる意味を明らかにする調査を実践し、石田は主要な調査協力者である福田須磨子と「反原爆」の思想を形成し、筆者は M さんという語り手との対話を継続して「被爆者になる」という語りが形成されるプロセスを描きだした。

石田は、福田との調査に着手するのとほぼ同時期に、〈漂流〉と〈抵抗〉という語りを捉える解釈枠組みを設定している。石田は、〈漂流〉と〈抵抗〉という対象を捉える枠組みを体現すると思われる福田との面接調査に取り組み、面接調査により得た語りだけではなく、福田により執筆された自伝等を含む質的資料を用いて「反原爆の〈立場〉」と題する生活史を描きだしている。「反原爆の〈立場〉」が収録された『反原爆』(1973)が出版さ

[†] 立教大学社会学部助教

れたのは、石田が福田と出会ってから、およそ7年後のことである。

筆者は、石田が提示した〈漂流〉と〈抵抗〉のように対象を捉える解釈枠組みを設定することはなく、「被爆者になる」という語りが対話的に構成されていくプロセスの記述を試みている。こうしたプロセス志向の記述を試みる背景には、長崎における被爆者調査に取り組む以前に筆者が体験した他者の語りを聞く経験にもとづく問題意識(問い)の存在がおおきく関係している。その問いとは、人が極限的な出来事を体験したときに、その体験は言語によりいかにして表象へもたらされるのかというものであった。

こうした問いを設定したゆえに、石田のように調査に着手すると同時に語りの解釈枠組みを定めて、その枠組みを検証するように聞き取りを行うのではなく、被爆者として生きる個人が、その後の人生を生きるなかで「語り得ないもの」を言語化するプロセスに注目するという立場から相互行為としてのインタビューをつづけることになった

調査に着手した当初は、語り部として活動する被爆者に半構造化インタビューを実施し、この調査をとおして M さんという語り手に出会った。この語り手は、他の多くの語り手のように自らの被爆体験や平和教育について語るのではなく、自らと同じように被爆者として生きる他者の語りを聞くなかで現れる「私」という現象に着目した語りを展開しているように思われた。

石田が対象とした福田と M さんの異なる点は、福田が彼女自身の生活史を書くなかで〈漂流〉という言葉を使いながら反核の主体性を形成する一方で、M さんは、たとえば福田を含む「わたしよりも大変な思いをして生き残った被爆者」の語りを聞くなかで被爆者としての自己を物語るようになったという点にある。筆者は、この語り手とのインタビューをつづけるなかで浮上した「被爆者になる」という語りを調査する〈わたし〉が聞くという経験に視点を定めたエスノグラフィを作成した(高山 2016)。

ここまで、調査者である石田と筆者による調査の基本的な性質の関係に簡潔に触れてきた。それぞれの調査の協力者として代表的な役割を果たすことになる語り手の相互的な関係を説明しておきたい。石田が主要な調査対象者とした福田と、筆者が対象とした M さんは被爆者の集いや証言の聞き書きの場をとおした交流のある関係にあり、M さんはインタビューにおいて生前の福田との交流の経験を語ることもあった。

M さんにとって、福田という人物は彼自身が被爆者として生きる、あるいは彼の語りに現れる「被爆者になる」という生きられた経験の語りを構成する上で重要な役割を果たす他者である。福田は 1922 年生まれであり 1974 年に 52 歳で他界している。M さんは 1930 年生まれであり、筆者が M さんと出会った 2005 年当時に、福田はすでに他界していた。

石田が〈漂流〉と〈抵抗〉という解釈枠組みをもって提示した「反原爆」の思想と、筆者が提示した「〈被爆者〉になる」という語りを聞く経験のエスノグラフィの差異と同一性を明確にしようとするとき、ふたつの視点から比較検討して考えることができる。ひとつは、水野節夫が指摘するように石田の『反原爆』において提示された「反原爆の〈立場〉 福田須磨子さんの戦後史」という作品のもつ「規範的にして経験的な性格」が、「〈被爆者〉になる」という語りを聞く経験のエスノグラフィには、どのように現れているかという視点である。仮に現れているとすれば、被爆という問題の質的調査の表現に特に顕著に現れると思われる「規範的にして経験的な性格」を筆者はどのように扱ったのかという問題が浮上する。(水野 1986: 175)。

もうひとつの視点は、調査者と調査協力者の自己が調査経験をとおしてどのように変容したかという視点で

ある。ふたつの視点は相互に関係している。この点について簡潔に触れておきたい。次節で検討するように、石田が提示した〈漂流〉と〈抵抗〉の枠組みが持つ「経験的にして規範的な性格」は、調査者の構えと提示された解釈枠組みのあいだに存在する「微妙なむずかしさ」を含んでいる(水野 1986: 176)。水野は、〈漂流〉と〈抵抗〉という枠組みを検討する条件として、福田須磨子以外の生活史を経験的に調査するしかないと指摘している。

たとえ先の枠組みが被爆者的存在形態を検討していく際に規範的観点からみて基本的に重要なポイントをついていたとしても、福田須磨子以外の被爆者の生活史をみていくさいには、その枠組みはあくまでも参考にすぎないのであって、まずいったんは、その被爆者に即するかたちで経験的にその生活史を掘り起こしてくるところから出発するしかないということである。(水野 1986: 176)

石田が提示した枠組みにたいして外在的な批判を試みても、そうした批判は〈漂流〉と〈抵抗〉が経験的に形成された枠組みであるゆえに意味をなさない。〈漂流〉と〈抵抗〉という解釈枠組みを外在的に検証するのではなく、同一のカテゴリーに属する対象についての石田とは別の質的調査の経験との比較という視点から内在的に検討する必要がある。

〈漂流〉と〈抵抗〉という枠組みの内在的な検討とは、いったいどのような視点からおこなうことができるのだろうか。おそらく重要になるのは、石田と筆者というそれぞれの調査者がおなじように着目した対象となる被爆者の人生において体験された出来事をめぐる認識の変化に着目し、つぎのような比較の視点をとることだろう。議論の見通しをよくするために、つぎの4点に整理しておきたい。(1)福田須磨子は、どのように自己の変容を経験したと認識していたのか。(2)石田忠は福田須磨子の自己の変容をどのように描き出したのか。(3)Mさんは自己の変容をどのように経験したと認識していたのか。(4)「わたし」は Mさんの自己の変容をどのように描き出したのか。

2. 反原爆思想の「微妙なむずかしさ」

水野は、生活史研究にたいする分析と解釈の不足という批判的評価をふまえ、従来の質的研究はどのような解釈枠組みを設定しているかを検討するという問題設定から、石田の調査において提示された福田の生活史の解釈枠組みを検討した(水野 1986: 175-6)。水野の視点は、なぜ、石田は「規範的」にして「経験的」な性格をもった〈漂流〉と〈抵抗〉という語りの解釈枠組みを設定するようになったのかというものである。石田の枠組みは、被爆者の体験は思想化されなくてはならないという意味で規範的であった。

こうした規範的な性質と生活史調査の関係を考える際に、石田の質的調査にたいする基本的な認識と、石田の調査において経験的に提示された規範的な枠組みの関係が問題になる。水野が指摘するように、石田は既存の生活史調査の方法を被爆者問題に適用するという調査研究のありかたにたいして懐疑的である。以下に示すのは、石田が福田の生活史を作成するにあたり記した「方法覚書」からの引用である。

すでに私たちは被爆者における〈体験の思想化〉に言及するところがあった。それは被爆者の思想的営為が、つねにその基底を生活者としての体験即ち生の現実にもっているということであった。このことは重大である。けだし被爆者はそこに自らの思想的営為を検証するすべを得ることができるからである。そうだとすれば、私たちが一人ひとりの被爆者の生活史と精神史即ち〈伝記〉に学ぶべきは言うを俟たない。換言すれば私たちは被爆者の伝記を書くことによって自らの思想的営為を検証しなければならないのである。それではこの作業においては、どういう点がおさえられなければならないのであろうか。それはむしろ経験的に確かめられていくよりほかはないであろう。生活史調査の方法の「典型」を他のところから求めて来て、それをここに適用しようと試みることなど真に効かないことと知るべきである。(石田 1973: 43)

石田の主張は明確である。石田は、個人的な被爆の体験を思想化する必要があると考えている。石田が考える思想化の基底には、「生活者としての体験即ち生の現実」があると捉えている。この基本的な主張をふまえると、調査者である石田は被爆者の生活史に「学ぶ」姿勢をとることになる。こうした被爆問題にたいする石田の基本的な構えは、質的調査法の認識のあり方にも影響している。上記の引用に示されているように、石田は生活史調査の方法の「典型」を他のテーマを扱う質的研究の事例や別の方法論から被爆者という対象に適用することには慎重でなくてはならないと主張する。

つまり、石田の調査の特徴は、対象となる人びとの生き方から「学ぶ」ことの重要性を説く一方で、被爆者の生き方の「典型」として〈漂流〉と〈抵抗〉という枠組みを強固に打ち出している点にある。この点について、水野はつぎのように述べている。

石田の発言は基本的に妥当なものと思われる。では、この主張の正しさと被爆者に対して普遍的に妥当するものとして提示されてきた彼の枠組みとの関係はどうなるのだろうか。この問題は微妙なむずかしさを含んでいるが、ここでは次の点を指摘しておきたい。それは、この枠組み自体は反原爆の〈立場〉を個人的に生き抜こうした福田須磨子という一個人の人格との出会いの中で生みだされてきたものであって、彼女自身が〈漂流〉と〈抵抗〉という発想をもって生きていたという経験的事実があったからこそ、規範的にして経験的な枠組が彼女の生活史をみていく際に有効性を発揮したのだということである。(水野 1986: 176)

石田が長崎で福田にはじめて会ったのは1967年12月のことである。石田は1965年に日本政府がはじめて実施した「原子爆弾被爆者実態調査」(厚生省調査)に調査者(石田は自らを社会調査家と呼ぶ)として参加しており、厚生省調査への参加が福田の生活史調査を実施する契機になった。さらにいえば、石田は厚生省調査への参加をとおして被爆者の立場という視点の重要性を認識するようになり、〈漂流〉と〈抵抗〉という語りの解釈枠組みを提示するに至った。この経緯について、石田自身は被爆者との対話のなかで調査を振り返り、つぎのように述べている。

私が担当した長崎の事例調査で出会った被爆者たちは、それぞれに、原爆にうたれたがゆえに苦しんでいる人たちでした。この被爆者たちをどうしたらその等身大においてとらえることができるのか、その方法の

探求が私の課題となり、それはやがて被爆者の生活史調査の方法として確立されていったわけです。厚生省の調査結果は「一般国民と大差ない」という概要の発表にとどまりました。が、それだけで四十年調査を終わらせるのは被爆者の期待に反する。どうしても被爆者の立場を明らかにしておかねばならないと考えました。(石田 1986: 137)

この引用から明らかなように、石田が〈漂流〉と〈抵抗〉という枠組みを設定する背景には厚生省調査への参加をとおした対象との出会いがある。念のために確認しておく、石田は「原爆被害者の〈立場〉」と題する論文のなかで長崎被爆者である渡辺千恵子と M 子さんの手記の考察をまじえて、〈漂流〉と〈抵抗〉という枠組みを提示している。このふたりの被爆者は、いずれも戦後の長崎において語る機会が少なかった被爆の経験を原水禁運動のように公的な場で語るようになった社会状況を代表する語り手であると推測できる。

石田は「長崎原爆青年乙女の会」が「原爆の生きている証人たち」からあつめた手記を編集した小冊子『もういやだ』に掲載された渡辺さんの「十一年の証言」と「長崎原爆乙女の会」による『原爆だより』(第 1 号、1955)を資料として、渡辺さんというひとりの被爆者が、「社会」を批判の対象として客観化し、そのことが「自分」と「社会」とのつながりを客観的に認識する可能性を与えるという枠組みを描き出している(石田 1986: 34-9)。

石田が残した資料を参考に主要な論点を確認しておこう。さきの引用で確認したように、石田が〈漂流〉という言葉を用いる背景には、〈抵抗〉の主体性を確立するために必要な〈立場〉を自覚することが必要であるとする考えがある。渡辺さんは、被爆から3年間の「わたし」を振り返り、その当時の心情をつぎのように記している。

例えば被爆後三年間というもの、私は全く自暴自棄となって幾度、命を絶とうと決心したかわかりません。ぜんぜん動かせなかったからだも少しずつ動かすことを日課とするようになりました。平均のとれないからだをささえながら編物に興味を持ちだし、講習に行けませんでした。一つ一つ編みながら本を見て研究を積み、一本の毛糸から一枚の服にできあがるその楽しさで、毎日のように絶望の気持ちをまぎらわしていました。しかし、学校時代の友達が自然と遠ざかって行くのが一番寂しいことでした。被爆後十年間、廃人として社会の片隅に忘れられていました。(石田 1986: 35)

渡辺さんの語りは、被爆後十年という時間を生きる被爆者の心理を明瞭に表現している。石田は渡辺さんの語りを解釈するにあたり、生き残った者が自分自身に問いかけることにより浮上する「生き残ったことの意味」という問題の所在を示している。渡辺さんにおいて、生き残ったことの意味を明確にすることは、自分の存在を「人間」として肯定することであると石田は解釈する。

この頃の渡辺さんは、自分の未来に何の可能性も信ずることができない〈絶望〉のなかに苦しみつづけた。自分は「何のために生きているのか」、その意義を彼女はどうしても見つけだすことができなかった。それは彼女を「何故生き残ったりしたのか」という思いに追いこんだのである。彼女には自分の存在を人間として肯

定することができなかった。(石田 1986:35)

被爆者が生き残ったことを罪とする意識の問題として明確に定式化したのは広島の実験者調査に取り組んだロバート・リフトンである。リフトンが1962年4月から9月まで広島で約70名の被爆者にインタビューを行っている。この調査の成果は1968年に“Death in Life: Survivors of Hiroshima”として発表されている。リフトンの調査と石田による渡辺さんの生活記録の解釈は、生き残ったことの意味を問う点で視点を共有している。

渡辺さんが被爆したのは16歳のときであった。工場の鉄筋のハリの下敷きとなり、下半身感覚を失くしたため、病床から動けなくなった。自分の思い通りにならないと、誰彼なしにあたりちらした。石田は、この当時の渡辺さんについて、「社会」によって〈否定〉された存在であると記している(石田 1986: 36)。渡辺さんの感情経験を含む生活記録を資料として、石田は個人の位相で捉えられていた被爆という体験が、他者からの承認により経験へと変容していく様をつぎのように描写している。

渡辺さんが「不具の身の劣等感を捨てようと決心」するためには、彼女を否定するものとして「社会」の崩壊が彼女の内部に起こらねばならなかった。一九五五年六月五日長崎母親大会で渡辺さんのことがはじめて発表され、代表たちが彼女を見舞うということがあった。そして渡辺さんは彼女を肯定する人々、彼女の価値を承認する人々をそこに発見したのである。「原子兵器の一番ひどい被害者であるあなた方こそ、世界の人たちに向かってうたえる最も重く、力強い発言権をもっているのですよ」。こうして渡辺さんは「原爆」の生き証人としての新生を迎えることができた。「原爆」の告発者たることによって彼女の「被爆体験」は一つの価値に転化する。それは自分の〈立場〉の肯定であり承認であった。(石田 1986: 36-7)

長崎被爆者が個人的な体験を公的な場で語るようになる歴史的な変遷の過程における、ある個人の感情経験に焦点を定めた分析という点で石田の記述は重要であるが、注目したいのは、この引用には、石田が考える被爆者という存在の「あるべき姿」が描かれている点である。さきの引用にもあるとおり、石田は「自分の存在を人間として肯定する」ということを可能にするための枠組みとして〈漂流〉と〈抵抗〉という構図を打ち出したのである。この枠組みを用いた石田の主張の主たる部分は以下の引用に集約される。

社会科学者の努力は、これを大きく二つに分けることができる。即ち一つは原爆被害がいかなる要因連鎖の下に被爆者の精神的荒廃につながって行くか、その人間破壊の過程の分析である。そしていま一つはこの精神的荒廃のなかから被爆者が立ち上がる可能性とその契機となるべきものの追及である。前者はいわば漂流の必然性をとらえようとするものであり、後者はそれへの抵抗の可能性をさがそうとするものである。(石田 1986: 33)

〈漂流〉の必然性をとらえると同時に、〈抵抗〉の可能性を探求しようとする石田の社会科学者としての営みはライト・ミルズの『社会学的想像力』を読む経験と関係している。石田はさきほどの被爆者との対話において

〈漂流〉という言葉を用いた経緯について振り返っている。石田はミルズの『社会学的想像力』から〈漂流〉という概念の着想を得ており、石田が会おうことになる福田もまた自身の生活記録を書くなかで〈漂流〉という言葉を用いていた。

〈漂流〉ということばそれ自体は、C・W・ミルズが『社会学的想像力』のなかで drifting ということばを使っているわけで、私はその例にならって、漂流ということばを使ったわけですね。『思想』論文は、もちろん、私としては学術論文として書いたつもりですが、たしかに、今までの学術論文となると、ああいった文体ではない。そうではあるが、今までの文体では被爆者問題をとらえられない、すでに出来あがった社会学理論を適用するだけになってしまうと思ったんです。それではいけないんで、被爆者に関する学術的論及はあのような文体のほかではあり得ないと感じたわけです。(石田 1986:140-1)

どうして、石田は被爆者問題というテーマに固有の文体が必要になると考えたのだろうか。被爆者問題というテーマが調査者に与える心理的な影響を含めて、被爆者という対象を書くための固有な文体がどの程度まで必要になるかを判断するのは難しいところである。筆者が取り組んだ長崎被爆者調査のリアリティに照らしあわせて考えるなら、このテーマに向き合おうとするときには、他者の語りを聞く経験を伝えるために対象との関係の変化に伴う調査者自身の立場の在り方を常に意識した文体が求められるという現実はあるとして存在している(高山 2017)。

具体的には、調査に取り組むなかで直面する、どのような場面で固有の文体が求められるのだろうか。固有の文体が求められる経験とは、いかなる経験なのだろうか。こうした問題を考える際に興味深いのは、石田がミルズの『社会学的想像力』を参照して用いた〈漂流〉という概念は、福田の自伝である『われなお生きてあり』でも使われていたという意味のある偶然の一致の現象(synchronicity)である。

六八年の論文は三月に書いて七月に出版されたんですが、ちょうどその頃、福田須磨子さんが『われなお生きてあり』のなかに、「漂流」ということばを使っていたんです。ほんとに驚きました。福田さんも自分のある時期を「漂流」と考えていた。被爆者との感性の一致というのか、福田さんの家で、やあ、やあ、と言いあったのを今でもよく覚えています。福田さんが原稿を書いたのは五、六月頃。まったく偶然に、両者が同時に、「漂流」ということばで、あるイメージを伝えようとした。それは私にとっては、非常な励ましと自信になりましたね。(石田 1968: 141)

水野の検討でも「彼女自身が〈漂流〉と〈抵抗〉という発想をもって生きていたという経験的事実があった」と触れられていたように、福田自身が〈漂流〉と〈抵抗〉という枠組みで自らの生を捉えていたという点は重要である。福田による自伝的な著作である『われなお生きてあり』(全3部構成)の第2部第1章のタイトルは「漂流」であり、第2部第1章の冒頭にはつぎのように記されている。

何もかも親まかせで、わがまま一ぱいに育った私は、家の経済がどうなっていようと、全然関心もなく、月

に決められた小遣金が無くなれば、何と言って父母からせしめようか、と考えるのが、苦勞と言えど苦勞と言えた。それがいきなり原爆によって、一切のものを失い、住む家も焼かれて、丸裸同然の姿で、世間という荒波の中に投げ込まれてしまったのである。私は一介の漂流物にすぎない。そしてこの漂流物は、何処かの岸にうまく辿りつく事が出来るものやら、荒波にのまれて沈んでしまうものやら、それとも最後まで漂流を続けるものやら皆目わからない。(福田 1987: 157)

福田は、被爆後 10 年目にエリテマトーデス(紅斑症)をわずらい、「自分の記憶力がだんだん減衰していくのを感じた。だから覚えていることは書いておかねばいけないと思って」書いた手記をもとにし、その 10 年後の 1965 年に『生きる 被爆後二十年の生活記録』を作成した(石田 1973: 47)。『われなお生きてあり』の初版が出版されたのは 1968 年のことである。

福田は被爆のときのことも大切であるが、それと同様に「さまよった 10 年間」の経験を書く必要であり、さらに「病気に倒れてからの生活(被床の 13 年間)」を書く必要もあると考えた。これらの生きられた経験は被爆のときのことを第1部、さまよった 10 年間を第2部、病気に倒れてからの生活を第3部として、それぞれを「200 枚程度」で書きあげられた(石田 1973: 48)。これが、『われなお生きてあり』である。上記の引用は、「さまよった 10 年間」を振り返る第2部の冒頭箇所であり、そこで福田は当時の自分自身を「一介の漂流物にすぎない」と表現している。

石田が福田の生活史を〈漂流〉と〈抵抗〉という枠組みで解釈するとき、石田が想定する〈抵抗〉という状態にしていることは「原爆」そのものへ抵抗する人間になることである。この枠組みはミルズの『社会学的想像力』から着想を得たという社会学史としての重要性もさることながら、福田というひとりの被爆者との出会いを伴った経験的な枠組みであり、その背景には被爆者援護法の制定に向けた社会運動との関係性という文脈も控えていることを考慮すれば、〈漂流〉と〈抵抗〉という枠組みが形成されることは必然的であったといえるだろう。しかし、M さんという被爆者との経験的な質的研究に取り組んだ〈わたし〉が、福田の『われなお生きてあり』を読むときには、〈漂流〉と〈抵抗〉という解釈枠組みにはかならずしも回収されない、それとは別の解釈の可能性も残されているように思われる。

3. 宗教心という視点

何処かの岸にうまく辿りつく事が出来るのか、荒波にのまれてしまうのか、最後まで漂流をつづけるのか。こうした心境の描写は、被爆の体験を書いた第1部第3章の「さすらい」にも描かれている。被爆後、大村の海軍病院で看護や雑用に携わっていた福田は、その当時の自分自身の心境について「私の精神状態が崩壊寸前の所まで追い詰められていようとは、誰も考えなかったに違いない」と記している。福田は父と母と長姉を原爆で亡くした。福田は5人兄弟の末娘であり、ふたりの兄は福田が小学校のときに死亡している。ふたりの姉は中国にいたが、長姉のみ被爆の前に長崎に戻っていた。被爆後の長崎に生きている人びととの関係のなかで、福田は生き残った自分自身をつぎのように捉えている。

死体を無造作に処理するひとびとの非情さと、それに対して文句も言わず冷たく見ている自分の非常さと、どれだけの差があるというのか。私は魂を抜かれた人間のように、ふらふらと歩いた。(福田 1987: 96)

亡くなった両親と長姉の「三十五忌の法要」を行うために訪れた光西寺で、福田は「空を突き抜けるようにそり立つ銀杏」を仰ぎながら、人間が生きる意味を考える。

ここがお寺であるからには、さまざまな人間が、喜怒哀楽の感情を持って、この山門をくぐったにちがいない。三百年に近いこの寺の歴史は、そうした人間たちにそれぞれの思いが、綾糸のように織りこまれているのであろう。その中には、今の私のような悲しみに押しつぶされ、生きる張り合いも失ってぼんやりと銀杏を眺めた者もいたことだろう。その人たちは、人間の生死の問題をどのように受けとり、どのような解決を見出して生き抜いたのであろうか。私は問いかけるように銀杏を見た。(福田 1987: 100-1)

こうした語りからは、福田が自己の変容をどのように捉えていたかという問題をめぐる、福田自身の認識のありかたをみいだすことができるのではないだろうか。寺の銀杏を眺めながら、被爆という出来事にかぎらずに、人間が生きていくうえで体験するさまざまな「かなしみ」に想いをはせて、この場所を訪れたひとびとが生死の問題をどのように受け取り、どのような解決を見出して生き抜いたのかを思案する姿が描きだされている。

たとえば、こうした福田による心象風景の描写は、彼女の生活史を被爆者問題という文脈に回収せずに、さまざまな生死をめぐる社会問題を考える手がかりを得るための質的資料として読むこともできるのではないだろうか。福田が光西寺を訪れたときに考えたことは、特定の宗教についての思索というよりは、出来事後を生きる意味の探求という社会学的なテーマであるように思われる。

それは、どのような意味で社会学的なテーマになるのだろうか。浜日出夫によると、ゲオルグ・ジンメルが論じる「宗教」を特徴づけるのは「競争の欠如」であり、宗教が目指すのは「魂の救済」である。浜によれば「富や権力、名声といった世俗的な財と異なり、魂の救済という財は希少性をもたない」ため、「ある人の魂が救済されることはほかの人の魂が救済されることをまったく妨げない」(浜 2008: 182)。ジンメルの社会学における宗教の議論は、筆者と M さんによるインタビューにより形成された「〈被爆者〉になる」という語りを解釈する枠組みも与えるように思われる。

紙幅も尽きたため、本稿において提示した論点をふまえた「〈被爆者〉になる」という語りの再解釈と、〈漂流〉と〈抵抗〉という枠組みの再検討という課題については稿をあらためて検討したい。本稿を閉じるにあたり、福田の生活史に描写される〈迷い〉を石田はどのように捉えているのかを知る手がかりになる箇所を引用しておきたい。

被爆者は、〈漂流〉と〈抵抗〉の、方向を全く異にした、二つの心をたえず経験するということになる。したがって〈抵抗〉の被爆者の理想像をつくりあげて、これを現実の、生身の被爆者の間に追い求めることなど無用である。しかしそのことは決して、〈抵抗〉の被爆者への途を模索することを、無意味ならしめるものではないだろう。(石田 1973: 42)

〈漂流〉と〈抵抗〉という方向を異にする二つの心は、福田とは異なる生を歩んだ被爆者においてどのように経験されたのだろうか。筆者によるインタビュー調査からは、その点についてどのような知見を提示することができるのか。その知見は、〈漂流〉と〈抵抗〉という枠組みを揺さぶるものになりうるのか。今後の研究課題といえるだろう。

参考文献

- 福田須磨子, 1987, 『われなお生きてあり』ちくま文庫.
- 浜日出夫, 2008, 「宗教論 合わせ鏡としての宗教と社会」早川洋行・菅野仁(編)『ジンメル社会学を学ぶ人のために』p.172-187, 世界思想社.
- 石田忠, 1973, 『反原爆 長崎被爆者の生活史』未来社.
- 石田忠, 1986, 『原爆体験の思想化 反原爆論集 I』未来社.
- Lifton, Robert J. , 1967, *Death in Life: Survivor of Hiroshima*, New York: Random House. (=2009, 梶井迪夫監修・湯浅信行・越智道雄・松田誠思訳『ヒロシマを生き抜く』岩波現代文庫.)
- Mills, C. W. , 1969, *The Sociological Imagination*, Oxford University Press. (=2017, 伊奈正人・中村好孝訳『社会学的想像力』ちくま学芸文庫.)
- 水野節夫, 1986, 「生活史研究とその多様な展開」青井和夫(監修)宮島喬(編集)『社会学の歴史的展開』p.149-209, サイエンス社.
- 高山真, 2016, 『〈被爆者〉になる 変容する〈わたし〉のライフストーリー・インタビュー』せりか書房.
- 高山真, 2017, 「ライフストーリーとオートエスノグラフィー」『哲学』No.138, p.41-59.